

第8章 考 察

第1節 石刃石器群との比較による上ミ野A遺跡の性格付け

石器群の組成と製作技術、ナイフ形石器の技術的・形態的特徴から、東北日本の石刃石器群と上ミ野A遺跡との類似・相違点について具体的に検討を行う。

(1) 石器組成

上ミ野A遺跡出土のトゥール総数は110点、石刃を含む剥片総数は596点、チップは1857点、石核23点である。新庄盆地に所在する石刃石器群と比べると、出土石器の総数は乱馬堂遺跡に次いで多い。トゥールと剥片も乱馬堂遺跡に次ぐ数量である。ただし、石核は上ミ野A遺跡で最も多く出土しており、乱馬堂遺跡がこれに次ぐ。会田容弘による新庄盆地の頁岩製石刃石器群の比較研究によれば、「剥片」数に対するトゥール数の割合が最も高いのが新堤遺跡第2次調査資料であり、新堤遺跡第1次調査資料と南野遺跡がこれに次ぐ（会田 1993）（註）。石核数に対する「剥片」数の割合が最も高いのが南野遺跡、乱馬堂遺跡であり、横前遺跡、山屋A遺跡がこれに次ぐ。上ミ野A遺跡での「剥片」（本報告の分類では、石刃と剥片を含む）数に対するトゥール数の割合は、山屋A遺跡にはほぼ一致しており、新庄盆地においては最も低い一群を構成する。石核数に対する「剥片」数の割合は、石核の出土していない新堤遺跡第1・2次調査資料を除くと上ミ野A遺跡が最も低い。石刃や石核の搬入・搬出を考慮する必要があるために単純な比較は難しいが、石器組成から判断するならば上ミ野A遺跡における石核1点当たりの剥片生産量は、新庄盆地内の石刃石器群と比較して低いものであったと推定される。

剥片数に対する石刃数の割合は上ミ野A遺跡が圧倒的に低い。併せて、石刃数に対するトゥール数の割合は上ミ野A遺跡が最も高い数値を示す。こうした石器組成の特徴は、上ミ野A遺跡に石刃以外の剥片を素材としたトゥールが多いという傾向によく整合している。

上ミ野A遺跡の主要なトゥールは、エンド・スクレイパー32点、ナイフ形石器25点、ノッチ11点、彫刻刀と鋸歯縁石器が各4点である。トゥールにおけるナイフ形石器とエンド・スクレイパーの主要な組成は、新庄盆地を含む最上川水系に位置する多くの遺跡に共通する。ただし、ノッチや鋸歯縁石器を主要なトゥールに含む遺跡は上ミ野A遺跡と横前遺跡、さらには三面川流域に位置する新潟県樽口遺跡A-KSE文化層（立木他 1996）に限られる。ノッチを主要なトゥールに含む石刃石器群の事例として、阿賀野川流域に位置する新潟県円山遺跡ブロック1（土橋 2003）があげられる。

(2) 剥片生産技術

上ミ野A遺跡において行われた剥片製作には、①各種の石核調整技術をあまり用いず、石核形状に応じて同一打面から連続的な剥離を行うか、あるいは打面と作業面を転移させながら剥離を進める、②剥片素材の石核からさらに小型の剥片を剥離する、という大別して2通りの方法が主に用いられたことが、剥片の属性分析や接合資

（註）会田（1993）が分類した「剥片」は、長さ20mm以上の最終剥離面がポジティブな面を残すものを指す。

料の工程分析から確認された。こうした方法で製作される剥片は概ね小型であり、遺跡に残された石核も結果的に小型で消費し尽くされたものが多くなる。石核1点当たりの剥片数が新庄盆地内の石刃石器群と比較して最も少ないという石器組成の特徴からも、上ミ野A遺跡では他の石刃石器群に比べて遺跡内で消費できる石材のサイズがもともと小型であったと考えられる。石刃製作は遺跡内ではほとんど行われず、石刃や石刃素材のトゥールの多くが遺跡外からの搬入品である。

打面と作業面の転移を繰り返しながら剥離を進める技術は山屋A遺跡においても確認されており、会田は、山屋A遺跡における小型寸詰まりな剥片の割合の高さや多打面石核の存在から、間接打撃の石刃剥離と剥片の単純剥離は一個体の一連の剥片剥離における段階の違いと理解した（会田 1993）。上ミ野A遺跡でも山屋A遺跡の剥片や石核に類似した資料が多数出土しているが、母岩分類や法量の比較の結果からは小型剥片の剥離工程以前に石刃が連続的に製作されたとは考えにくいこと、剥片からさらに小型の剥片を剥離する技術が併せて存在することから、山屋A遺跡における剥片剥離技術とは異なるものと理解できる。

石核調整技術を用いずに、トゥールの素材に利用されない小型不定形剥片を製作する事例は秋田県龍門寺茶畠遺跡においても確認されており、同一母岩資料中には石刃製作技術が伴う場合と、剥片素材石核を用いた小型剥片製作技術が伴う場合がある（加藤 2004）。福島県塩坪遺跡でも石刃石器群に小型の横長剥片を連続剥離した石核が伴う（鈴木他 1983、藤原 1983）。このように、東北日本におけるAT降灰以降の時期の石刃石器群においても、石材の消費過程で石刃製作技術が変化する、あるいはその他の剥片生産技術を併用するという状況は散見される。消費石材のサイズ・形状やその質、あるいは剥片剥離作業の過程で変化する石核形状に応じて、用いられる剥離技術がいかなる変異を示すのかという点を明らかにするためには、今後とも個々の石器群に対する詳細な分析を蓄積していくことが必要である。そして、剥片生産技術からみた上ミ野A遺跡の性格やその位置づけについては、他遺跡での分析結果を踏まえてさらに検討を進める必要がある。

なお、剥片素材の石核を用いて剥離を行うという技術的特徴は、新庄盆地では上ミ野A遺跡以外には確認されおらず、AT降灰以降の時期の東北日本では、龍門寺茶畠遺跡、山形県越中山遺跡K地点（加藤 1975）やお仲間林遺跡（阿部他 1991・1995）、新潟県樽口遺跡A-KSE文化層ブロック4・7・10、御淵上遺跡（中村 1971、麻柄・古森 1992・1993）などわずかな遺跡で認められる。

（3）トゥールの素材剥片の選択性

上ミ野A遺跡出土のトゥールの素材剥片は、エンド・スクレイバーの約3分の1で石刃、3分の2で幅広厚手の剥片が用いられる。他のトゥールについても石刃以外の多様な形状の剥片を用いる割合が高いと推定される。ナイフ形石器には2点であるが横長剥片が用いられる。素材剥片の選択にみられるこうした傾向から、複数の剥片生産技術の併用や一個体の剥離作業の過程で生じる多様な形状の剥片が幅広く利用されていることがわかる。そして、素材剥片に対しては多様な二次加工技術（連続的な細部加工と鋸歯状加工、折断加工）を用いてトゥール製作が行われる。素材剥片に石刃を用いる割合が上ミ野A遺跡ほど低い遺跡は他には認められず、剥片剥離技術が部分的に類似する山屋A遺跡においてもトゥールの素材剥片の約68%が石刃である。

（4）ナイフ形石器の技術的・形態的特徴と剥片生産技術の関係

東北日本の後期旧石器時代を対象とした編年研究においては、石器群の出土層位や剥片生産技術とともに、ナイフ形石器の形態的特徴に注目した研究が蓄積されてきた（加藤 1992など）。石刃石器群を構成する石器のなか

で、ナイフ形石器は遺跡間の形態差がより大きく、石器群を比較する一つの重要な基準となる。上ミ野A遺跡においては、I・II類として分類した規格的な二側縁加工のナイフ形石器が多数出土しているが、この一群のナイフ形石器は東山型や杉久保型とは異なり、①石刃以外の剥片が素材に用いられる割合が高い、②急角度の連続的な二次加工によって素材剥片の形状を大きく変形させる、という特徴が認められる。したがって、こうしたナイフ形石器は、石刃技法を技術的な基盤とすることなく作り出すことが可能であり、石刃技法を含む多様な剥片生産技術と二側縁加工のナイフ形石器に代表される二次加工の発達したトゥールとの関係においても石刃石器群とは異なる特徴を明瞭に認めることができる。②の技術的特徴については茂呂型にも共通するが、福島県塙坪遺跡にみられるように石刃技法を主要な技術基盤としており、ナイフ形石器の素材にも石刃が供給されている点で上ミ野A遺跡とは異なるものといえる。

I・II類に類似した技術的・形態的特徴を有する二側縁加工のナイフ形石器は、東北日本においては新潟県樽口遺跡A-KSE文化層ブロック10、長野県東裏遺跡第2地点II石器文化層ブロック7（土屋・谷 2000）で出土している。また南関東地方での代表的な事例として、相模野台地では柏ヶ谷長ツサ遺跡第X文化層で二側縁加工のナイフ形石器が多数出土している（提編 1997）。武藏野台地では、下柳沢遺跡第1文化層のブロック外から同一母岩と認定された二側縁加工ナイフ形石器と角錐状石器各1点が並んで出土している（小川・松本・亀田 2000）。

このように、上ミ野A遺跡出土のI・II類に類似したナイフ形石器は東日本においては新潟県や長野県、あるいは南関東地方の相模野、武藏野台地で出土が確認されており、少数ながら国府型ナイフ形石器や角錐状石器、剥片尖頭器、各種スクレイパーなどが共伴する事例が多い。上ミ野A遺跡においても、I・II類のナイフ形石器に横長剥片素材のナイフ形石器や鋸歯状加工のナイフ形石器、さらに剥片尖頭器に類似した基部加工のエンド・スクレイパーが伴う。剥片生産技術の特徴としては、石刃製作とともに打面・作業面転移を伴って多様な形状の剥片を生産する技術や剥片素材石核を用いた剥片生産技術が併存する石器群が多い。したがって、I・II類のナイフ形石器に共伴するトゥールの内容や剥片生産技術については、上ミ野A遺跡を含む上記の各石器群において共通する側面を認めることができる。

東日本におけるこうした二側縁加工のナイフ形石器を含む石器群には国府型ナイフ形石器や角錐状石器、剥片尖頭器が共伴することから判断すると、九州も含めた西日本の石器群との関連のなかで上ミ野A遺跡を含む上記の各遺跡を位置づけることが可能であろう。ただし、ナイフ形石器とともにエンド・スクレイパーを主要なトゥールとする上ミ野A遺跡の石器組成は東北日本の石刃石器群の多くに共通する特徴であり、さらに石刃素材の基部加工ナイフ形石器やエンド・スクレイパーが伴うことからも、この石器群の複合的な性格が窺われる。

第2節 石器・礫群分布の関係と遺跡の性格

(1) 石器群と礫群の共伴関係

上ミ野A遺跡では、大きく2ヶ所の遺物集中が認められる。1ヶ所はBD02、BD03、BE02、BE03区の範囲に多数の石器と2ヶ所の礫集中が重複して分布しており、6×3m程度の楕円状の集中を形成する（以下、調査区中央部の石器・礫集中とする）。もう1ヶ所は調査区北東部のBF03区において、径2m程度の密集した礫集中を形成し、その範囲内や周辺に若干の石器が分布する（以下、調査区北東部の石器・礫集中とする）。垂直分布の検討か